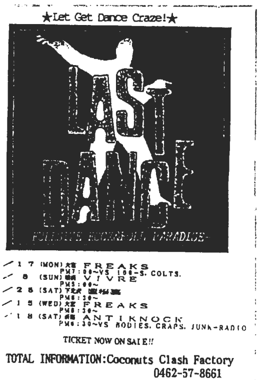
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις·
ὁ βίος, ὑπόληψις.’

47号 1992.4.18
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: LAST DANCE 1992.2.16 新宿アンティノック 1992.3.28 下北沢屋根裏 1992.4.15 大宮フリークス


★Let Get Dance Craze!★
LAST DANCE
2/17 (MON) 大宮 FREAKS PM7:00~VS 100-S. COLTS.
3/8 (SUN) VIVRE PM5:00~
/28 (SAT) 下北沢 屋根裏 PM6:30~
4/15 (WED) 大宮 FREAKS PM6:30~
/18 (SAT) ANTIKNOCK PM6:30~VS BODIES. CRAPS. JUNK-RADIO
TICKET NOW ON SALE!!
TOTAL INFORMATION:Coconuts Clash Factory
0462-57-8661

LAST DANCEを知ったのは2月16日アンティノックにTHE WAIATSをききに行ったとき。あえていうならロカビリーなんだろうけど、ヴォーカルが印象的でLAST DANCEという名前が心に残った。その時は「いいな！」って思っても、私はすぐに自信がなくなるので、「いいな！」って思ったことを信じたくてまたライブに行く。3月28日屋根裏。はじまったとたん「あ、やっぱりいい！」ってなれて、きいているあいだじゅう自分に自信をもっていられた。いい気分だよ、ロックンロールにのっかって自分を信じていられるのって。4月15日大宮フリークスでもそうだった。LAST DANCEが一番目ではじまったときには10人くらいしか観客がいなくて、それもみんなテーブルについているっていう状態だったんだけど目一杯楽しかった。あれくらいすてきなライブだと、観客が私一人だとしても全く気にならないだろうな。LAST DANCEの「FEEL SO FREE」をきいていると、ほんとに自由を感じるし、自由になれるよ。

WORDS: ギルバート・オサリバン

「『アローン・アゲイン』は、日本でこうして再び取り上げてもらったことで、ゴールドディスクをもらったりもしました。でもそれは単なる結果でしかないと僕は思ってますね。売れるため、他人に受け入れてもらうためには何がいいかと考えながら曲を書くのは、とても危険だと思う。だって誰も人の心の中なんか覗けないでしょう。それを無理やり想像しようなんて、傲慢なことじゃないかな」

（週刊文春 4/9号より）

LIVE: JURASSIC JADE 1992.3.14 新宿ロフト

3月14日(SAT) 新宿ＬＯＦＴ 03(3365)0698
CASBAH
BRAIN DEAD
JURASSIC JADE
4月5日(SUN) 高円寺20000Ｖ
DEATH SIDE
鉄アレイ
RAIS CAIN
JURASSIC JADE

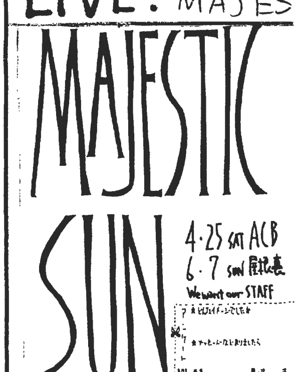
はじめから強い衝撃。次の日（3月15日）が誰かの命日とかで「再生を祈って」といって歌いはじめた3曲目くらいから髪の毛が逆立つ感動で、全身に何回もふるえが走った。比類ないヴォーカルがすばらしい演奏によってきく側に迫ってくる。音楽の中で、ありのままでいる極限のすごさとしなやかさがあった。体は身動きできないほど重く固くなっているのに心は上へ上へと昇っていく。後半、この日から再加入したというもう一人ギターの人が入ってやったのだけど、それまでの感動に加速がついて、私のエネルギーは全開したらしくTシャツになっても汗をかくほどだった。ああいうときって精神の力（はたらき）の大きさを知ることができる。内部が燃えるってこういうことなんだって実感できる。内部が燃えるって生きてるってことだ。
キャンベルは「人は人生の意義を探し求めているという。だが私はこう思う。われわれが求めているのは生きていることを体験することなのだ」といっている。まさに。

4/5高円寺20000Vは中止でザンネン！次は4/30シェルター

LIVE: ROCK N' ROLL CONVENTION 1992.2.1 渋谷公会堂

3バンドやって、一番目が元デビルズのヴォーカル、ギター、ドラムと元DEAD ENDのクール・ジョーがベース、もう一人ギターという5人編成のTHE SILVER DOGS。2番目がロスアンジェルスのBLACKBOARD JUNGLEというバンド。最後が元レッド・ウォーリアーズのギターの人のバンド（あとのメンバー4人は外人）CASINO DRIVE。
3バンドとも共通しているのはおとなしいバンドだということ。ロックンロールをやっているのに、きいていてワクワクしてくることがない。ロックンロールって「でたらめ」といっていいようなものが感じられないと、まるでおもしろくない。もちろん演奏がでたらめというんじゃなくて、ちゃんとした演奏をとおしての気分の「でたらめ」。私たちは現実の生活の中では、でたらめをしないように生きている。でたらめなことをするとたたかれる。まじめでいることが評価される。
ロックンロールの「でたらめ」が私たちの心を「でたらめ」にしてくれるとクレージーになれる。CASINO DRIVEのベースの人にしかその「でたらめ」がなかった。

LIVE: MAJESTIC SUN 1992.3.26 新宿ACB



目当てのバンドがなくてライブハウスに行ったことって今まで4、5回くらいしかなくて、それもほとんどいいライブに出会ったことがなかったけど、この日はMAJESTIC SUNのすばらしいライブに出会えた。ギター＝ヴォーカル、ベース、ドラムの3人編成。3人なのに音がものすごく厚くてパワフル。硬派のロックンロール、硬派のブルース。3人のバランスがすごくよくとれている。
アンケートに「どんなイメージでしたか」とあったのでウーン！と考えて「ジョニー・ウィンターとジャニス・ジョプリンをハードコアにしたような…」って書いた。

（MAJESTICという単語、辞書で調べたら「威厳のある」、「荘厳な」、「堂々とした」とあった。）

ARTICLE:「どっこいフジヤマは生きている」

フジヤマの渡辺正氏の責任編集のページ。

おかげさんで、ライブ企画も決して楽ではないけど、順調だし、いつものゴリゴリの直球勝負の「フジヤマガンガンファイト」も、変化球勝負の「フジヤマ新寄席」もいいかんじだ。新寄席は第3回は早くも5月3日（日）に決定で、私は頭がグルグルしていて体がもたない。笑うにも命がけのイベントだな、コレは。世間は不況らしいけど、フジヤマは昔から不況なので別にこれといって変化は無いのだ。どっこい生きてるって訳だ。だいたい宝島の東京ディープショップガイドなんて本が何年にも渡って出版されているけど、フジヤマはのったことがないのだ。フジヤマがディープでなくて何がディープなのだろうか‥‥と、世間に問いてみたいけどディープマップにも無視されるほどのディープな店なのかも知んない。これは誇れるディープさとでも[illegible]ながら云っておこう。別にディープだかなんだかどうでもいいや。好きにやらせてもらうよ。ひとつひとつ大事なことをやってゆくしかないんだから。中込さんが原稿の〆切りがたいへんだあと毎回のようにSOSで書いてるけど、自慢じゃないけどワタシャCDジャーナル誌にも2回も落としたぞ。エラクはないけどね。〆切りは守りたいが守れない場合が、かわいい時もある。要するに良い原稿書いて下さい。そればかりが良心ってもんです。ゴキゲンな原稿なら仕事もへらないでしょう、きっと。できあがったものへの宣伝文をチャラチャラ書くのはお仕事ライターにまかせて、できあがる前の混とんかげんを見事に伝えることが実は大事なことなので、それを伝えられるひとはそうは居ない。はじめたばかりでウンコみたいなバンドの持つパワーやまっすぐな純粋性を、消させず、大きくする可能性を見い出すことでどれだけのバンドや人間が勇気づけられ、意志や活動にはねかえるか。そこんところが、我々のお役目のような気がするよ。今はバンドブームが去ったとか云ってるけど、昔からおもろい人達やバンドは消えたことがないんだから。やってる奴は、いつだってやってるんだし、ちゃんと見てゆく必要があるんだ。

（アンティノックで出している「SOS」Vol.40より）

LAST DANCEをきいていると、上の記事にある「はじめたばかりでウンコみたいなバンドの持つパワーやまっすぐな純粋性」をたしかに感じる。

BOOK:「ディーバ」デラコルタ著（飯島宏訳 新潮文庫）

シンシア・ホーキンズはいくら申し込みがあっても、レコードの録音とテレビ、ラジオへの出演は頑（かたく）なに拒んでおり、そのため、彼女のコンサートは毎回、ファンが胸を躍らせて待つ、特別の催しになっていた。

またシンシアは年間のコンサートが十二回を超えることも認めなかった。死ぬような思いを月に二度以上も味わうことはできないというのが理由だった。

照明がスポットライトに変わり、会場が水を打ったように静まり返った。ステージの奥でピアノが明りを受けて黄金色に輝く。もうひと息だ。と、左そでの小さい扉が開いて、赤い豪奢（ごうしゃ）なドレスに身を包んだシンシア・ホーキンズが登場し、ステージの中央に進み出る。スリットが割れて腿がのぞく。一見後光を思わせるヘアスタイル。ふっくらした肉感的な顔に、ちらっと不安の影が走る。ジュールはテープレコーダーのスイッチを入れた。ピアニストの指が鍵盤（けんばん）に躍る。シューベルトの歌曲だ。ディーバのソプラノがジュールの体にしみわたると、涙が頬を伝い始めた。すでに音楽の世界の奥深くに引き込まれていた。

あの奇跡のテープはナグラにセットされている。ジュールはスイッチを入れた。静まり返ったシャンゼリゼ劇場の光景が目に浮ぶ。彼は深い溜息をついた。ピアノが鳴り始め、次いでディーバのソプラノが流れ出す。華麗極まりない、それでいて抑制の利いた歌いぶりだ。スピーカーは声の粒子を、響きの微細な変化を、息づかいを、そして、清らかな、密度の高いビブラートを比類なき忠実さで再現する。歌曲に込められた微妙な情趣のひとつひとつが大地に吸いこまれる水のようにジュールの全身にしみわたって行く。ピアノの音は澄みきって、強すぎず弱すぎず、どこをとっても、非の打ちどころがなかった。

ジュールは現実の世界を忘れ去った。音楽にすっかり引き込まれて、彼の心は宙に舞い上がった。ディーバのドレスを抱き締めながら、彼はそこからたちのぼるかぐわしい芳香にいつまでも陶然となっていた。

「ねえ、ジュール、あたしはどこの国へ行っても、似たような人たちに取り巻かれるの。みんな、すごいお金持で、時々はちょっぴり音楽を愛することもあるけど、何といっても、その人たちは成功者が好きなのよ。決して若いアーチストのために手を貸してやろうとしないの。たとえば、あなたが音楽家の卵だとしても、カーネギーホールに出るまでは目もくれない。あなたがスターになるのを待っているだけなんだわ。あなたが気まぐれで、現実ばなれして、その上、残酷であってもかまわないし、彼らはむしろそれを望んでいるの。なぜかって、そのほうがおもしろいからよ。誰ひとりとして、あたしが本当はどんな人間かなんてことに興味を持たない。誰ひとり、情熱を込めて音楽を愛したりしない。きっと、あたしを本当に心に留めてくれる人もいるんでしょうけど、あたしはそういう人たちに出会ったことがないわ。それとも、一枚のプログラムにサインする時間だけは会えているのかしらね」

ジュールはシンシアをじっと見つめた。絨毯（じゅうたん）、鏡、絵、そして、自分を圧倒していた、この豪奢そのものの世界をそっくり忘れて、彼はただシンシアのことだけを考えていた。

「よくわかります」

「だからこそ、あなたにはここにいてほしいの。だからこそ、あなたはここに泊っていいの。何ていうのかしら、ごまかしのない人って、あたしにはすぐにわかるの」

映画“DIVA（ディーバ）”のシンシア・ホーキンス。（ディーバとは女神のこと）